

6. 神経系の疾患（アルツハイマー病を含む）

文献

水嶋丈雄. パーキンソン病に対する薬物治療と鍼灸治療併用療法についての治療成績 2 群間のランダム化比較試験. *日本東洋医学雑誌* 2011; 62(6): 691-694. 医中誌 Web ID: 2012099074

1. 目的

パーキンソン病に対する薬物治療と鍼灸治療併用の効果の比較

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (封筒法) (RCT-envelope)

3. セッティング

水嶋クリニック、長野、日本

4. 参加者

パーキンソン症状を有する外来患者 738 名のうち、研究条件に適合する 203 名。

5. 介入

Arm 1: 鍼灸治療併用群 103 名 (男性 45 名、女性 58 名、平均年齢 63.9±8.2 歳)。薬物治療と鍼灸治療を併用。中医弁証による経穴にセイリンディスポ針 0.13mm を皮膚から 4mm まで浅刺。さらに振戦・筋固縮に対し絡穴・郄穴にカナケンディスポ中国針 0.28mm にて皮膚から 2~3cm 刺針し 50-60Hz で筋パルスを施術。最後に頭顔部に小児針。

Arm 2: 薬物治療単独群 95 名 (男性 50 名、女性 45 名、平均年齢 64.7±9.8 歳)。L-DOPA と DOPA 作動薬を組み合わせた薬物療法。

6. 主なアウトカム評価項目

パーキンソン病進行度 Hoehn-Yahr 指数、パーキンソン病国際評価基準 UPDRS II・III、パーキンソン病 ADL 評価基準 PDQ-39。

7. 主な結果

以下の検定結果はいずれも群間比較である。前後比較については記載されていない。Hoehn-Yahr 指数より、5 年後に鍼灸治療併用群で薬物治療単独群に比べて有意な病状進行抑制を認めた (P=0.042)。UPDRS II より、5 年後に鍼灸治療併用群で薬物治療単独群に比べて有意な改善を認め (P=0.043)、項目別では一部の項目のみ有意に改善した。UPDRS III より、5 年後に鍼灸治療併用群で薬物治療単独群に比べて有意な病状進行抑制を認め (P=0.042)、項目別では一部の項目のみ有意差がみられた。PDQ-39 は検定結果が記載されていない。

8. 結論

薬物療法と鍼灸治療の併用は、パーキンソン病の進行抑制に効果を与えた。

9. 鍼灸医学的言及

鍼灸治療の筋固縮に対する特異的効果、脳内黒質線条体に対する神経保護作用について言及している。

10. 論文中の安全性評価

記載なし。

11. Abstractor のコメント

5 年もの長期にわたって追跡調査を行った、優れた研究デザインの貴重な研究成果である。しかし、いずれの指標も、検定結果は群間比較しか記載されていない。有意差の有無に関わらず、各群の前後比較結果についても明らかにできれば、考察がさらに深まるのではないだろうか。今後はこの研究デザインを他の疾患にも応用することで、鍼灸のエビデンスを高めることが望まれる。

12. Abstractor and date

保坂政嘉 2016.11.19.